

問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本文化の中で「時間」の典型的な①ヒヨウショウは、一種の現在主義である。現在または「今」の出来事の意味は、それ自身で完結していて、その意味を汲み尽くすのに過去または未来の出来事との関係を明示する必要がない。時間の流れには一定な方向があるが、始めもなく、終わりもなく、歴史的な時間の流れは、特定の方向へ向かう無限の直線に似る。その中の出来事の前後を語ることはできるが、それ以上に(1)時間の全体を構造化して考えることはできない。鎌倉時代に流行した絵巻物の一場面は、全体の話のすじから切り離しても十分に愉しむことができる。徳川時代から近代にかけて書かれた途方もない数の随筆集は、相互に関連するところ少ない断片的文章から成るが、個別の文章を全体から切り離して読んでも味わいが深い。それは(イ)『枕草子』以来(ロ)『玉勝間』を通じて今日に到る文学的伝統の一つである。そこには日本の時間のヒヨウショウの著しい特徴が実に鮮やかに反映されている。

同じことは日常生活の習慣についてもいえる。日本文化の中では、原則として、過去は(殊に不都合な過去は)、(ハ)「水に流す」ことができる。同時に未来を思い患う必要はない。(A)「災害は起こるだろうし、バブル経済ははじけるだろう。明日がどうなるろうと、建物の安全基準をこまかして今カネをもうけ、不良債権を積みあげて今商売を盛んにする。もし建物の危険がばれ、不良債権が回収できなくなれば、その時現在で、深く頭を下げ、「世間をお騒がせ」したことを、「誠心誠意」おわびする。要するに未来を考えずに現在の利益をめざして動き、失敗すれば水に流すか、少なくとも水に流そうと努力する。その努力の内容は、「誠心誠意」すなわち「心の問題」であり、行為が社会にどういった結果を及ぼしたか(結果責任)よりも、当事者がどういった意図を持って行動したか(意図の善悪)が話の中心になるだろう。(2)文化的伝統は決して亡びていない。

始めなく終わらない時間のもう一つのヒヨウショウは、時計の針のように(2)ジュンカンする時間である。そこでは出来事が一回限りではなく、何度でも起こる。(B)「ここで注意する必要があるのは、出来事の一回性の否定は、必ずしも現在の出来事への注目の集中を弱めるのではなく、むしろ強めるように作用してきたということである。今年の冬が去年の冬と変わらぬとすれば、今年の冬を知ることで同時に去年の冬を知ることができる。その方が記憶に頼るよりも正確だろう。同じような春がくり返されるならば、現在の春の観察は未来の春の予見に通じる。ジュンカンする季節は、(3)過去および未来のすべての季節の現在化を意味する。俳人の(ニ)季語は、過去・現在・未来のすべての季節を示す。例は挙げるまでもないだろう。時間の「全体」は、現在(今)が無限に連なる直線、または無限にジュンカンする(C)である。それぞれの現在(今)は、その全体の「部分」であり、相互に等価的であるとすれば、日本文化の伝統が強調する現在集中主義は、全体に対する部分重視傾向の一つの表現と解することもできる。そこでは(4)全体を分割すると部分が成り立つのではなく、部分が集まると全体が結果する。

「空間」の全体は無限の広がりである。部分は(ニ)「すなわち「私の居る場所」である。その場所は、典型的にはムラ共同体であり、境界は明瞭で、境界の内と外の二つの空間がムラ人にとっての世界の全体を作る。ムラの領域は世界空間全体を分割した結果ではなく、ムラの集まりがクニを作り(クニが何を意味するかはさしあつたりの問題ではない)、空間の全体はクニの外部の無限の広がりとして与えられたものである。私の住む場所(ニ)「(ニ)がまず存在し、その周辺に外側空間が広がる。外側空間の全体は、所属集団の内側と直接の取り引きをもつ特定の面(たとえば仏教や工藝)を除けば、強い関心の対象ではなかった。八世紀の初めに(ホ)『古事記』を編んだ人々は、もちろん朝鮮半島の三国・唐・天竺の存在を知っていたにちがいない。しかし『古事記』の冒頭に掲げた創造神話は、日本列島の創造だけを語って、その外部の地域の創造には一行も触れていない。一八世紀後半オランダ製の世界地図が輸入された後になっても、『古事記』解説の代表的な学者(5)本居宣長の世界観は、「神代記」(※)のそれから根本的に異ならなかった。宣長の住んでいた所(ニ)「(ニ)が世界の中心で、その中心に係わる限りで周辺部(朝鮮半島や中国やオランダなど)が存在する。まず世界の全体が存在し、その中に部分としての各国(たとえば日本!)が位置づけられるのではなかった。

個人の所属集団は必ずしも国家(日本)だけではない。徳川時代の武士層にとっては主として藩、自作農にとっては主としてムラ、大きな商家にとっては堺や大阪の町人社会であったろう。明治以後に発達した都会の中産階級は、彼らの「アイデンティティ」の根拠を所属官庁や大企業にもとめていた。それぞれにそれぞれの(ニ)「(ニ)で生き、働き、取り引きし、連帯し、競争していた。(ニ)「(ニ)は伸縮し、重層する。家族から国家まで、「ジェンダー」から世代まで、一人の人間は多くの異なる集団に属するが、それぞれの集団の領域を(ニ)「(ニ)として意識する。(ニ)「(ニ)から世界の全体を見るのであって、世界秩序の全体からその一部分(日本)「(ニ)「(ニ)を見るのではない。その構造、すなわち(6)部分が全体に先行するものの見方は、敗戦と占領後の二〇世紀後半に変わったろうか。例を日本国の対外的態度にとれば、根本的に変わったようにはみえない。

国際的な問題を解決するために、各国は自国に有利な解決策を主張する。そのための手段は、大きくみれば、三つあり得るだろう。第一の手段は、力づくで自説を他国に強制することである。これは帝国主義的な態度である。必要とされる力は主として経済力や軍事力であり、これらの力のどちらかまたは双方が圧倒的でないならならぬ。それほど強大な力は、二〇世紀後半の日本国にはなかった。第二の手段は、自国の利益に直接係わる場合にのみ問題の領域に介入し、国益を強く(3)ジュンカンに主張する外交である。(7)これは国際問題に対して日本国がとってきた典型的な態度である。たとえば米国の「貿易摩擦」、ロシア(旧ソ連)との「北方領土」交渉。第三の手段は、直接に国益を主張するのではなく、問題の領域全体について、複数の可能な解決法の中から国益に有利な方策(国際的秩序の一つ)を選んで提案することである。旧ソ連も、米国も、中国も、EUもしばしばそういう態度をとった。日本の対外的態度がなぜ第三手段よりも第二手段に著しく傾いたか。個別の場合にはそれぞれ複雑な条件がからんでいることは言うまでもないが、半世紀の歴史を振り返ってみれば、大きな背景は日本国の視線が国の外部よりも内部へ向っていたということに要約されるのではなからうか。すなわち関心の中心は(ニ)「(ニ)日本にあり、その日本を部分として含むところの世界(全体)全体ではなかった。(ニ)「(ニ)文化の伝統は今も生きています。

かくして(8)「(ニ)「(ニ)の文化も、(9)「(今)の文化と同じように、部分と全体との関係に(4)カンゲンされる。別の言葉で言えば、部分が全体に先行する心理的傾向の、時間における表現が現在主義であり、空間における表現が共同体集団主義である。部分と全体との関係において、「今」文化と「(ニ)「(ニ)文化は出会い、(5)ニウショウし、一体化して、「今(ニ)「(ニ)文化となる。

〔※注〕「神代記」＝『古事記』上巻の神代(日本で、神武天皇即位以前の神が支配したという時代)についての略称。

(加藤周一『日本文化における時間と空間』による。なお、本文の一部、変更・省略がある。)

問1 二重傍線部①⑤のカタカナ部分を漢字で書きなさい。

問2 波線部(イ)〜(ホ)についての、次の各問に答えなさい。

- ① 波線部(イ)・(ロ)に関係の深い事項を、次から二つずつ選び、記号で答えなさい。  
 a 中宮定子 b 紫式部 c 歌論 d 賀茂真淵 e 歌物語 f 随筆 g 本居宣長 h ものづくし
- ② 波線部(ハ)のように「水」を使った慣用句について、次のa〜dの意味合いで用いられるものを後から選び記号で答えなさい。  
 a 優劣がはっきりつくこと。 b 関心を引きつけさせること。  
 c 横から邪魔をすること。 d しつくりと調和しないこと。

③ 波線部(ニ)について、「季語」を収集し網羅した書物を何というか。漢字で答えなさい。

④ 波線部(ホ)の説明として正しいものを、一つ選び記号で答えなさい。

問3 日本最古の歴史書 伊 日本最古の随筆集 ウ 日本各地の伝説などを集めた書 エ 日本最古の伝奇物語

問4 空欄A・B・Cについて、次の各問に答えなさい。

- ① Aに入る文を次から選び、記号で答えなさい。  
 ア 明日は明日の風が吹く イ 一寸の光陰軽んずべからず ウ 明けない夜はない  
 エ 幼年老いやすく学成り難し オ 去る者は日々に疎し
- ② Bに入る文を次から選び、記号で答えなさい。  
 ア 歳月は人を待たず イ 春眠暁を覚えず ウ 歳々年々人同じからず  
 エ 盛年重ねて来たらず オ 冬来たりなば春遠からじ
- ③ Cに入る語を次から選び、記号で答えなさい。  
 ア 円周 イ 曲線 ウ 楕円 エ 線条 オ 周縁

問5 傍線部(一)とは、具体的にどういう意味か。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 過去・未来の出来事と現在または「今」の出来事の関係を示す必要がないと考えること。
- イ 現在または「今」の出来事の意味が、それ自身で完結するように考えること。
- ウ 一定の方向に流れる時間を、過去・未来を貫く無限の直線のように考えること。
- エ 現在または「今」の出来事と過去・未来の出来事とを体系的に関連づけて考えること。
- オ 歴史的な時間の流れを、現在を起点とする終わりのない直線のように考えること。

問6 傍線部(二)とあるが、その説明として適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 努力の内容を重んじる考え方に、人の心の美しさを尊ぶ日本文化の伝統が生きている。
- イ 未来を思い患わない考え方の中に、部分を切り離して楽しむ日本文化の伝統が生きている。
- ウ 結果責任を重んじる考え方の中に、時間の構造を考える日本文化の伝統が生きている。
- エ 過去にこだわらない考え方の中に、現在主義という日本文化の伝統が生きている。

問7 傍線部(三)とあるが、その説明として適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 過去・未来・現在の季節がすべて同じように見えること。
- イ 現在の季節が過去や未来の季節も示しているように感じられること。
- ウ 現在が永遠に変わらないように感じられること。
- エ 過去が積み重なって現在に鳴り、現在の積み重ねが未来になると言うこと。

問8 傍線部(四)とはどういうことか。次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 全ての時間は、過去・現在・未来の流れとしてとらえることができる。
- イ 無数の現在が連なって、過去から未来にいたるすべての時間が生成される。
- ウ 現在という時間は、過去と未来に照らし出されることで意味づけられる。
- エ 時の流れの中では、現在は常に過去となり、未来もまたすぐに現在となる。
- オ 過去が現在を形成し、その現在がさらに未来を形成していくことになる。

問9 傍線部(五)とはどのようなものであったと筆者はとらえているか。次から選び記号で答えなさい。

- ア 宣長は『古事記』の時代の人と同様、日本列島以外の地域を念頭に置かなかった。
- イ 宣長の世界においては、日本列島も朝鮮半島やオランダなども同等に扱われていた。
- ウ 宣長は『古事記』の時代の人に知られていた三国・唐・天竺も含めて世界をとらえた。
- エ 宣長の世界に、朝鮮半島や中国やオランダなどが含まれることはなかった。
- オ 宣長の関心は、もっぱら『古事記』に書かれた日本列島のことに向けられていた。

問10 傍線部(六)とあるが、次のうちそれに相当する見方はどれか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 世界の中で、「ここ」＝日本がどう見られているかを重視する見方。
- イ 内と外の境界をたえず明確にし、外よりも内の領域を優先させる見方。
- ウ 世界を「ここ」と関係づけることなく認識しようとする見方。
- エ 「ここ」という中心に対して、世界という周辺部が存在するという見方。
- オ 世界に順位をつけず、各部分を等しい存在として秩序づける見方。

問11 傍線部(七)とあるが、第二の手段を日本がとってきた理由を、本文中から三〇字以内で抜きだしなさい。

- ア 季語は、過去・現在・未来のすべての季節を現在化する機能を持っている。
- イ ムラの集まりがクニを作り、クニの集まりが無限の広がりをもつ世界空間を作る。
- ウ 徳川時代の人は、中国やオランダ同様、日本も世界の一部分に過ぎないと考えていた。
- エ 国際的な問題の解決策のうち、最も寛容な条件はやはりカットウ的な経済力である。
- オ 日本の文化は、まず部分としての「ここ」を意識してから、世界という全体を見る。

問12 次に示した文のうち、本文の内容に合致していないものを選び、記号で答えなさい。